

SS4 体験プログラムの実際

執筆者：平野達也氏（ホールアース自然学校）

自然体験活動やエコツアーは、ある程度予定された時間・場所・内容等の枠組みの中で実施されます。その活動の単位のことを「プログラム」と呼びます。プログラムの実施は、エコインストラクターの最も重要な活動であり、直接参加者に働きかけることができる機会です。ここでは、プログラムの企画・実施、及び評価についての基本的な考え方、(一例を取り上げて)実際の展開について学びます。



1、「体験プログラム」の基礎的理解

人々が自ら森をトレッキングしたり、川で泳いだり、郷土料理作りを楽しんだりするときに、それを「プログラム」と呼ぶことはありません。現代人のライフスタイルが自然や地域文化と縁遠くなってしまった状況の中、体験活動のある意図に沿って、効果的に提供するために「プログラム」を組み立てるのです。そうすることで、多くの人々に対し、継続的に一定の質を保ちながら、活動を安定的に提供することができます。

プログラムは、野外フィールドで行う活動的なもの、屋内で語り部の話を静かに聴くもの、また五感に働きかける感性的なものなど、様々な種類が挙げられます。プログラムを実施する意図や対象者、扱う素材、ガイドの技量等の条件によって、その内容は異なります。



写真「上」:

ホテル宿泊者ファミリー層に向けて、身近な自然の不思議を伝えるプログラム。草や木の種子、葉っぱ、昆虫、野鳥、哺乳動物の痕跡などの生態について、体験的に伝える内容。

写真(下):

一般の大人向けの沢登りプログラム。参加者同士が協力し合い、人力だけで川を遡上する。助け合いの精神とともに、清流の美しさ、人と水の関係性を伝える内容。





写真（上）：
教育旅行の参加者である小学生に向けたネイチャートーク・プログラム。地域の自然環境と人間の生活との関わりについて、写真パネルやスライド等を用いて伝える内容。

写真（下）：
一般の大人向けのチームビルディング・プログラム。様々な課題を参加者同士が協力し合って乗り越えながら、チームワークを高めあい、人間関係についての気づきを得ることを目的とした内容。



写真で紹介した4つのプログラムはあくまで例示であり、この他、人（ガイド）が介在せずに、案内サイン等を使用した“セルフガイド・プログラム”や、特定のテーマに関して数日間に亘り行われる講習会全体など、様々なプログラムの形態が考えられます。

大切なのは、前述した諸条件（プログラムを実施する意図や対象者、扱う素材、ガイドの技量等）により、効果的なプログラムとして企画・提供することが可能となり、参加者にとっての学びや気づきが大きくなることです。

尚、「プログラム」は一つの型であり、それに囚われすぎると、自然状況の急な変化を察知して臨機応変に対応したり、ハプニングを楽しんだりすることができなくなることがあります。型としてのプログラムの組み立てを意識しながら、現場においては環境変化や参加者の反応等を効果的に取り込むことも大切です。

写真：
その場所、その季節の素材の魅力を引き出し、参加者の興味を誘う。プログラムの組み立てを意識しながら、その場のハプニングを上手に活かす。



2、体験プログラムの企画要件

体験プログラムを提供する事業者として企画を作成するには、いくつかの要件を考慮する必要があります。主には「活動理念」「資源性」「市場性」「安全性」といった4つの要件が挙げられます。企画の作り方については、別科目「事業企画・運営の基礎」で扱いますが、ここでは、プログラム実施の前提となる企画の基礎的な要件を概説します。

1)「活動理念」

体験プログラムは教育的要素を含むため、企画・実施者の活動理念が反映されます。単に楽しみを提供するだけでなく、体験を通して参加者に何を伝えたいのか、そしてどのような気付きを提供したいのかということをも“核”として、プログラムが構成されます。この活動理念を常に意識することで、一つ一つのプログラムにおける意図が明確になります。その上で、プログラム毎に具体的なねらいと達成目標を設定することが重要です。尚、企業や行政等からの受託事業の中で行われるプログラムについては、事業主体の理念や意図が大きく反映されることとなります。

2)「資源性」

体験プログラムの核となるのは、自然や文化・生活等の素材であり、それを「資源」と呼びます。一般の人々にとって興味・関心が高い、或いは地域性を強く表現しているといった価値を有するものであり、プログラムを企画する上で、とても重要な要素となります。

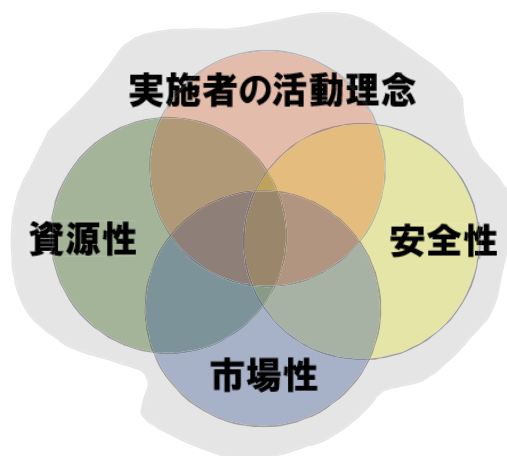
また、エコツーリズムの考え方の中では、資源は直接的な保護・保全の対象として位置づけられます。体験プログラムを通じて、資源に直に触れたり、利用したりすることが多いため、常に資源にかかる負荷に対して配慮する必要があります。

3)「市場性」

2)で取り上げた「資源」そのものの魅力・価値の大きさは、体験プログラムを組み立てる上で大きな要素となります。特に、市場に訴求するか否かについては、資源に拠る部分が非常に大きいと言えます。しかし、同じ資源を取り扱う場合においても、“企画”によって、市場訴求力が変わるといふ事実もあります。丁度、同じ野菜や肉を仕入れても、調理方法によって料理のおいしさが変わるといふことに似ています。

地域にある資源が、ターゲットとする市場に対して訴求するものなのかどうか、或いは訴求させるためにはどのような切り口で企画を立てればよいのかについて、他地域でのプログラム企画・実施の事例にアンテナを張り、地元の資源の価値・魅力について客観的な評価を加えることが大切です。

その上で、参加者として想定する層や料金、時期・時間、活動展開の設定、タイトル付けや広報活動の工夫等を行うことで、市場性を高めることが可能となります。



4)「安全性」

体験プログラムは、野外で行われることが多いため、虫刺されや転倒など、様々な危険に囲まれています。体験活動の裾野が広がれば、それだけ野外活動に不慣れな人たちの参加機会が増え、事故の発生につながる可能性が高くなります。企画段階では、プログラム内容と想定する参加者属性を加味しながら安全対策を行います。

3、体験プログラムの構成と体制

1) 体験プログラムの構成

体験プログラムは、“一連の流れ”に則って実施されます。一連の流れとは、参加者がスムーズにガイドや他の参加者との関係を築き、或いはこれから行われるプログラムそのものに対して抱く心理的な不安から解消され、プログラムに含まれる体験を楽しみ、学び、気づきを得ることができ、最終的に実施者側の想いや意図を十分に受け取る状況を生み出すための展開（時間経過）を指します。

参加者からはあまり意識されることはありませんが、ガイドとしてこの一連の流れを十分に意識しておくことが大切です。

プログラムは下図のように、大きく分けて3つのパートに分けることができます。はじめの「導入」部分では、ガイドと参加者、或いは参加者同士が打ち解けあい、リラックスした雰囲気を生み出すことが大切です。また、これから行われるプログラムの概要・魅力を予め伝えることで、参加者側が心の準備をするとともに、体験に対する期待、興味・関心を高めることもできます。

「本体」部分では、自然・文化についての情報提供や、ゲーム、リラクゼーションのアクティビティなど、予定された活動を行います。ここがプログラムのメインとなるため、例えば、何にでも活発に興味を示す小学生、或いはゆったりとした時間の中で植物を観察することを求める熟年層等、参加者の興味・関心やトーンに合わせた展開で、グループ全体がまとまった雰囲気を作り出すことが大切です。それにより、ガイドが場に応じた展開を選択したり、参加者の学びや気づきを効果的に引き出すことが可能となります。また、予定された活動だけではなく、参加者のリクエスト、自然状況の変化等をうまく拾い上げて、臨機応変に対応することで、“その時ならではの”体験を提供することができます。

最後の「まとめ」の部分では、同じ体験を共有したガイドと参加者全員がプログラムを振り返り、改めて記憶にとどめる作業をすると効果的です。このときに、実施者或いはガイドが、プログラムを通じて伝えたかったメッセージを織り込むことで、参加者に意図を伝えることができます。

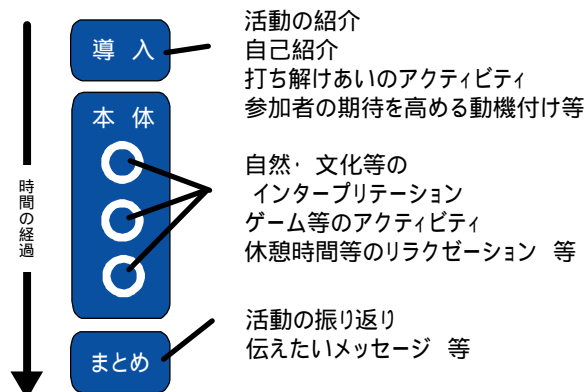


図1：体験プログラムの構成

2) スタッフ体制

現場におけるプログラム提供のスタッフ体制は、主に参加者数やプログラム内容、予算（人件費含む）等によって決まります。本部事務局は予約調整、当日の緊急時対応の役割を担いますが、基本的に実施現場に派遣されるガイドが、全体的な責任者としてプログラム展開を決定します。

複数体制でプログラムを実施する場合、予め役割分担を行います。主に、リーダーとしての役割を担い全体を統括するガイド、そしてそれを補助する（或いは何らかの特化した役割を持つ）ガイドに分けられるのが一般的です。

特に野外で行うプログラムの場合、補助的な役割を担うガイドの動きは重要で、プログラム全体をスムーズに運営できるかどうかの要となります。例えば、グループ本体をリーダーとなるガイドが引率している際、何らかの事情で遅れている参加者をフォローし本体に合流させる、或いはグループ本体よりも先に行き、障害となる事柄（危険や他グループとのバッティング等）を予め調整・回避するといったことが考えられます。

補助するガイドの具体的な役割例としては、安全確保や時間管理、参加者のグループ管理、非常時対応、プログラムに対するフィードバック、記録等が挙げられます。

一方、参加者とコミュニケーションを図る上では、内部的な役割分担に固執することなく、全員が同様に参加者と接することが大切です。リーダー以外のガイドが、単にグループの後ろについて歩いているだけということにならないように、全体に対して目を配り、参加者とコミュニケーションをとりながら、先の展開を予測しながら効率的に動くことが大切です。



写真：

補助スタッフは、参加者とコミュニケーションを取りながら、プログラムがスムーズに運営されるように配慮する。

左の写真は、一般の人が通行することをプログラム参加者に伝えている。

4、体験プログラムの評価

体験プログラムは、一度企画したら完成というものではありません。むしろ何度も実践を繰り返しながら“育てる”意識が必要です。一般的にPDCAサイクル(Plan Do Check Action)が事業改善のモデルとして使われますが、体験プログラムの企画・実施を当てはめると、下図のようになります。

プログラムの評価には、主に参加者アンケート、実施者・ガイド自身による評価があります。参加者アンケートは、プログラムの良し悪しを参加者の視点から評価してもらうためのものですが、プログラム当日に至るまでの手続きや、価格設定、広報活動、今後の参加意向等について、包括的な情報を得る手段となります。

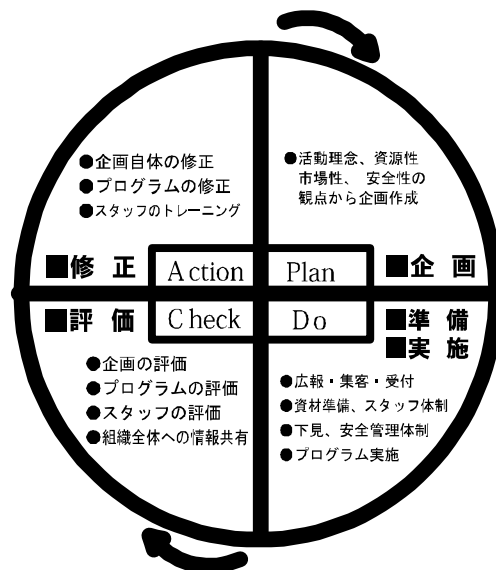


図2：体験プログラムのPDCA サイクル

アンケートの作成にあたっては、記入する参加者への配慮として、回答しやすい質問形式、ボリュームとなるように心がけることが大切です。

実施者・ガイド自身による評価については、参加者から見えない部分である企画・準備段階や当日のスタッフの動き、段取り等についての詳細をふりかえり、プラス評価点、改善点、次回への申し送り事項を確認します。また、評価の結果は、プログラムの担当者だけでなく、組織全体で共有することで、以降のプログラムで同様のマイナス評価を避けることができます。

ホールアース自然学校

イベント・プログラム アンケート用紙

◆行事名： ●●●● (●年●月●日) 担当： ●●●

氏名： _____

年齢： 〇歳 男性・女性

- 今回のイベント・プログラムについてお答えください。
 - 全体を通して ()
 - 5) とても満足 4) 満足 3) 普通 2) やや不満 1) 不満
 - その理由 ()
 - 時間配分・進行について ()
 - 5) とても満足 4) 満足 3) 普通 2) やや不満 1) 不満
 - その理由 ()
 - ガイド・インストラクターは ()
 - 5) とても満足 4) 満足 3) 普通 2) やや不満 1) 不満
 - その理由 ()
 - 料金について ()
 - 3) お手ごろ 2) 適当 1) 高い
 - 申し込み手続きについて ()
 - 3) わかりやすい 2) 普通 1) わかりにくい
- 今回一番印象に残ったことは何ですか？
- ホールアース自然学校のイベントに参加するのは初めてですか？
 - 初めて □2回目 □3回目 □4回目以上 ()
- 今回はどなたと参加されましたか？
 - 1人で □友人と(同姓・異性) □家族と() □その他()
- このイベントを知りましたか？該当するすべての項目に○をつけてください。
 - ホームページ □メルマガ □DM □チラシ □友人から
 - ホールアース自然学校通信 □新聞 () □雑誌 ()
 - その他 ()
- イベントやホールアースをインターネットで検索しましたか？ キーワードをお教えてください。
 - 検索したキーワード () □検索していない
- 今後ホールアースからのメールマガジンをご希望されますか。
 - はい □いいえ □すでに読んでいます
 - はいと答えたらメールアドレスを記入してください⇒ _____ @ _____
- 今後どのようなイベント・行事に参加してみたいですか。(複数選択可)
 - 登山 □クライミング □カヌー □マウンテンバイク □陸上球 □キャンプ
 - サマーハウス □スキー/スノーボード □夜間イベント □農業体験
 - アウトドアクッキング □その他 ()
- その他、ご意見・ご要望・スタッフへのメッセージ等ありましたら、ご自由にどうぞ

ご協力ありがとうございました

アンケートは、A4×1枚程度とし、なるべく選択式とすることで、参加者が答えやすくなります。プログラム自体に対する評価の他に、情報源やその後の参加意向についての項目を設けることで、次の展開の参考とすることができます。

資料：ホールアース自然学校イベントアンケート

5、体験プログラムの展開例

ここでは、体験プログラムの一例を挙げ、展開について概説します。

日 時：平成 19 年 10 月 14 日（日）13：00～14：30

場 所：富士山西麓田貫湖周辺

対象者：愛知県内の自然観察の指導者 20 名程度

体 制：ガイド 1 名、補助ガイド 1 名

目 的：田貫湖周辺の自然（植物、動物等）を素材として自然観察を行いながら、その生態（繁殖の戦略、捕食のパターン等）を学び、身近な自然の世界で展開される営みに気づく。



プログラム前はガイド同士の情報共有が重要。参加者に係る情報（属性やニーズ等）、展開の方法（体験の順序や参加者にとっての学びの流れ等）役割分担、プログラムを通じて達成すべき目的・目標などを確認する。



フィールドの下見を行いながら、どのような自然や人文資源を取り上げ、どのようにメッセージを伝えるのか、或いは危険箇所はないかなどを具体的に確認する。



素材や資源に対する知識・情報がプログラムの基礎となる。十分な下調べを行う。



プログラム開始前に引率者（グループ参加の場合）と打合せ。参加目的や参加者の様子、留意点等について情報を共有する。



参加者と合流。自己紹介やプログラムの流れの簡単な説明、安全説明等を行う。ガイドと参加者との間の緊張、参加者同士の緊張をときほぐすことも大切。



口頭での説明だけでなく、パネルや写真等を使って視覚的に情報を伝える等、様々な手法がある。



参加者が自ら発見したり、観察したりすることで、気づきや学びの効果を高めることができる。ガイドからの一方向的な説明ではなく、参加者との、或いは参加者同士の双方向コミュニケーションがプログラムの質を高める。



五感を使って自然を感じたり、生態系の仕組みを学ぶために、ゲームや体を動かす活動を組み込むこともある。動きのある活動は、プログラムの流れに緩急をつけるうえでも効果的。



参加者が自らの感性を表現する場を設定することで、プログラムに奥行きがでる。スケッチや俳句等、その手法は様々。



プログラムの最後のまとめの時間。プログラム全体のふりかえりを行いながら、参加者の感想などを聞くと同時に、プログラムの意図やガイドの想い等を伝えることができる。

プログラム終了後は参加者アンケートやスタッフの反省会でよかった点、改善点等をまとめ、次のプログラムにつなげる。